

イメージ体験生成メカニズムの解明

－感情情報が視覚情報へ及ぼす影響を中心に－

学位論文内容の要旨

主観的意識体験としてのメンタル・イメージに関する研究のうち、認知心理学的な基礎研究では、もっぱら刺激無しに生成される視覚像としての性質に焦点が当てられ、一方、臨床心理学的な応用研究においては、感情喚起という側面に注意が向けられてきた。本論文は、このようなイメージに関する個別的理解を統一し、イメージ体験生成メカニズムの、全体的解明への第一歩を踏み出そうと試みたものである。本論文ではこのような問題意識の下、2つのテーマが検討されている。第1のテーマは、イメージ体験における視覚情報と感情情報の共起性に関する実証的な検討である。日常体験としては実感されながらも、必ずしも実証されてこなかったこの問題が、本論文では2つの実験によって解明されている（実験1, 2）。第2のテーマは、イメージ体験の生成過程において、感情情報が視覚情報に影響を及ぼすか否かの検討である。両情報の共起がイメージ体験の本質的特徴であるならば、その生成過程を解明するには、各情報の生成過程をそれぞれ個別に検討するだけでなく、両者間の相互作用についても検討する必要がある。本論文では、この相互作用のうち、特に、感情情報が視覚情報へ及ぼす影響について、実験、調査に基づき繰り返し検討を行い（実験3～7, 調査2）、そのメカニズムについて、詳細な考察が行われている。

本論文は、第1章「序論」、第2章「名詞と形容語の感情価の標準化」、第3章「イメージ体験における視覚情報と感情情報の共起性」、第4章「視覚情報に及ぼす感情情報の影響Ⅰ」、第5章「視覚情報に及ぼす感情情報の影響Ⅱ」、第6章「全体的考察と今後の展開」から構成されている。

第1章では、先ず本研究の検討対象となるイメージ体験の定義が行なわれている。その後、現在まで提案されている代表的なイメージの生成モデルが概観され、それらがもつ問題点の整理をとおして、本研究の目的の提示が行われている。

第2章から第5章までは、著者が行った2つの調査と7つの実験について報告されている。

第2章の「名詞と形容語の感情価の標準化（調査1）」では、多数の名詞、形容語の収集と、その感情価を統制するための標準化が行われており、以降の実験では、この調査を基に、刺激が選定されている。

第3章では、イメージ体験における視覚情報と感情情報の共起性に関して著者が行った、2つの実験研究が報告されている（実験1, 2）。これらの実験では、イメージによる視覚像の喚起に伴って自動的に感情が生起することを示唆する、感情プライミング様の現象が見

いだされており、日常的な体験としては実感されるものではあるが、必ずしも行動的データによって証明されてはいなかった、イメージ体験における視覚情報と感情情報の随伴性の実証された。

第4章では、イメージ体験に浸ることによって喚起される感情の強さと方向（すなわち、イメージの感情価）が、イメージの視覚的側面（すなわち、含まれる視覚情報量）に影響を及ぼすか否かが検討されている（実験3～7）。このような問題を行動的指標によって検証するため、イメージ体験に含まれる視覚情報量によって、反応時間が変動する課題が新しく考案され、ポジティブもしくはネガティブというイメージの感情価を操作したときに、イメージの視覚情報量が変化するか否かが、課題に要する反応時間の違いから検討されている。まず、以降の実験に用いる刺激の統制を目的とした実験3が行われ、引き続き実験4, 5, 6, 7において、ポジティブとネガティブなイメージ体験の間に、上記課題の反応時間に差が生じるか否かが、複数の異なる方向から検討された。その結果、ポジティブなイメージ体験の方が、ネガティブなものより視覚情報量が多く、鮮明な視覚像が形成されていることを示す結果が得られた。このことから、イメージ体験生成過程の中に、感情情報がイメージの視覚的側面に影響を及ぼすサブプロセスが存在している可能性について考察されている。

第5章では、感情情報が視覚情報へ影響を及ぼすという、第4章で得られたイメージ体験生成過程に関する知見を、別の側面から検討している。前述したように、ポジティブなイメージ体験がネガティブなものより鮮明であるならば、感情価とイメージ価の間には、ポジティブな感情価の名詞であるほどイメージ価が高く、ネガティブになるほどイメージ価は低くなるといった相関関係があると予測される。そこで、調査1によって感情価の標準化が行われた全ての名詞のイメージ価を調べ、両変数（感情価とイメージ価）間の相関分析が行われた。その結果、ネガティブな感情価の単語群では、ネガティビティが高くなるほどイメージ価が低くなるというような相関関係が見られたが、ニュートラル及びポジティブ単語群では、両指標間に有意な相関は得られなかった。この結果と先の第4章における諸実験の結果を合わせて、筆者は、以下のような考察を行っている。すなわち、ニュートラルな項目と比較して、ポジティブなイメージ体験の方が鮮明な視覚像を形成しやすかったのではなく、ネガティブなイメージ体験では、鮮明な視覚像を形成しづらくなった（視覚情報の抑制）のではないかということである。さらに、ネガティビティが高くなるほどイメージ価が低くなるということは、この抑制の強さがネガティブ項目全般で一様なのではなく、ネガティビティが増すにつれて、その強度が増すことを示しているのであろうと解釈している。

第6章の「全体的考察と今後の展開」では、本研究の第3章、第4章、および第5章から得られた知見を概観した後、これらを統合したモデルを提案している。従来のモデルでは、イメージの感情価と視覚情報量の関係を説明するため、感情価を計算し、ネガティブな場合は長期記憶から喚起された視覚情報を抑制するという機構（サプレッサ）が考えられていたが、筆者は、この機構がネガティビティの強度によって抑制の強さを変動させると考えられるべきであるという、新たな機能の提案を行っている。サプレッサにこのような機能があると仮定すると、強いネガティビティを持ち、かつ鮮明なイメージ体験というのは起こりえないと考えられるが、PTSDや強迫性障害のクライアントなどではしばしばそのようなイメージが報告される。これは一見、本研究結果と矛盾しているようにも思える

が、臨床的な症例は、クライアントのサプレッサ機能に障害が見られたために生じた結果であるという観点から説明している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 菱 谷 晋 介
副 査 教 授 田 山 忠 行
副 査 准教授 応 雄

学 位 論 文 題 名

イメージ体験生成メカニズムの解明

－感情情報が視覚情報へ及ぼす影響を中心に－

本研究は、視覚情報と感情情報が複合した、主観的意識体験としてのイメージの生成過程を解明しようと試みたものである。従来、イメージに関する認知心理学的な基礎研究では、その視覚面に焦点が当てられていた。一方、臨床心理学的な応用研究においては、感情面に注意が向けられてきた。本論文は、このようなイメージに関する個別的理解を統一し、その生成メカニズムの全体的解明への第一歩を踏み出そうと試みたものである。本論文では、2つのテーマの検討をとおして、この問題を解明しようとしている。第1のテーマでは、まず、イメージ体験における視覚情報と感情情報の共起性に関する検討が行われ、そのことが実証されている。このような、両情報の共起がイメージ体験の本質的特徴であるならば、その生成過程を解明するには、各情報の生成過程をそれぞれ個別に検討するだけでなく、両者間の相互作用についても検討する必要がある。そこで、次に第2のテーマとしてこの相互作用に焦点を当て、特に感情情報が視覚情報へ及ぼす影響について検討が行われ、そのメカニズムに関する詳細な考察が行われている。

本研究の第1の成果は、イメージとは、視覚情報だけでなく感情情報も随伴して喚起される、類知覚的かつ感情的な体験（イメージ体験）であることを明らかにしたことであろう。日常体験としては実感されながらも、必ずしも実証されてこなかったこの問題が、本論文では巧みな実験によって解明された。イメージの生成過程を検討する場合、どちらか一方の情報の方に注意が向けられることが多かったが、本研究における実験の結果は、両者ともに焦点を当てなければその全体的理解にはつながらないことを意味している。つまり、イメージの理解を深化させるためには、視覚面、感情面ともに注目する必要があることを示唆するものであり、これは当該研究領域において大きな価値をもつ知見といえる。

本研究の第2の成果は、イメージ体験に含まれる感情情報が視覚情報に影響を及ぼすことを、行動的指標を用いた実験で示し、かつ、その影響がネガティブ感情による視覚情報の抑制であることを示した点である。両情報の共起がイメージ体験の本質的特徴であるならば、その生成過程を解明するには、各情報の生成過程をそれぞれ個別に検討するだけでなく、両者間の相互作用についても検討する必要がある。そのような影響があることは、これまでも臨床場面での経験や少数の実験研究から示唆されてきたことではあるが、いず

れも単なる解釈の域を出るものではなかった。本研究の知見は、それらの解釈の妥当性を確認し、さらに、従来のモデルを深化・発展させた。これは、イメージ体験の生成過程を解明するという基礎研究へ貢献するだけでなく、いずれは、臨床場面への応用も期待できる知見であるという点からも評価できよう。

また、本研究には 2 つの調査研究が含まれているが、それらは、本研究における刺激作成や、新たなモデル提案の土台になったという以上の意味を持っている。すなわち、これらの調査結果は、感情価が標準化された形容語、およびイメージ価と感情価両変数が標準化された多数の名詞を提供することとなり、今後のイメージ研究および感情研究に貴重な基礎資料を提供している。この点にも、本研究の学術的貢献を認めることができる。

以上述べてきた本論文の成果、すなわち、イメージ体験の生成による視覚情報と感情情報の共起性の証明、イメージ体験における感情情報から視覚情報への抑制的な影響の確証、およびそのメカニズムに関する考察、さらに感情価とイメージ価が標準化された名詞群の提供などは、いずれも大きな学問的な貢献をなす成果であると考えられる。そのことは、本論文に記されている研究成果が、当該領域の査読付きの学術雑誌に、複数掲載されていることから確認できる。一方、より大きな人文学的視野からの自身の研究の位置づけなど、些かの弱点がないわけではないが、これは、本論文の成果を損なうものではなく、さらなる学問的経験の蓄積によって、十分に解決される課題であると認められる。

本審査委員会は以上の審査結果に基づき、全員一致して、本論文の著者本山宏希氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。